

海という名の本屋が消えた (105)

平野義昌

光村弥兵衛・利藻(3)

1898(明治31)年、光村利藻は活動写真撮影機と同時にX線装置一式も買った。小西屋六兵衛店(以下、小西六)は日本初輸入品ゆえ利藻に売り込んだ。なぜ医療機器まで買うのか、と思う。お金持ちのだからさだが、これが世の役に立つ。99(明治32)年、兵庫県立神戸病院がX線装置貸し出しを願った。外傷なく痛みを訴える患者の骨折箇所を発見、治療できた。同年海軍省から無線電信実験のためX線用コイル貸与の依頼があった。アメリカに注文しているのでその到着まで。利藻は海軍ファンだから勿論承知した。実験の結果が1905(明治38)年5月27日「日本海海戦」開始の遠距離通信「天気晴朗ナレドモ波高シ」である。

同じく1898年、利藻は大阪荒木商店から蓄音機も購入した。名称通り音を蓄え(録音)、再生する機械。ラッパから音声を吹き込むと針が振動して蝸管に波状の溝を作り録音、この溝に再生用の針をあてると音が出る。従来は手回し式だったが、新式ゼンマイ仕掛けである。芸人や軍楽隊の演奏を録音。さらに蓄音機を持って上京。小西六の紹介で長唄の名手、そこから清元、常磐津、義太夫の一流奏者につながる。歌舞伎役者には台詞を吹き込んでもらった。清元と常盤津、長唄と義太夫の掛け合いなくジャンルを超えた共演もあった。すべて自分のためだけの録音である。多人数の演奏を録音するためにラッパの数を増やすなど改造し、大型機器を特注した。運搬費用がかかり、途中壊れることもある。蝸にカビ発生の心配もあり、維持費もいる。

くとにかく売るつもりではないのであるから、採算などを考える必要はない。金にあかしてやるのであるから、どんなことでも出来たわけである。>註1

川崎造船所副社長・川崎芳太郎が自邸に女性皇族を迎えた時、利藻自ら出向いて自慢の録音を披露している。

以上の機器について『利藻伝』は値段を記載していない。私には見当も比較する物品も思いつかない。1903(明治36)年にレコードが発売され、再生のみの蓄音機が登場。これが50～60円。註2

映画撮影も録音も趣味以上の意味があった。〈……鼠舩にしている芸人の名人芸を記録として残しておきたいがためである。利藻は大金持ちのパトロンとして芸人たちに接しているうちに、その「時間芸術」をなんとかそのままのかたちで保存したいと考え、映画撮影機や蓄音機に手を出したのである。>註3

居留地にアメリカ製自転車が並び始めたのも1898年頃のこと。値段は200～250円(註4)。川崎芳太郎、写真家・市田左右たらと自転車同好会「神戸双輪会」を結成、利藻が会長になった。居留地の運動場で競争会を開催し、京都、大阪、奈良へ遠乗りした。

利藻の書画・骨董蒐集も範囲が広い。刀剣と甲冑は1897(明治30)年の長男初節句に始まる。伊庭後見人の紹介で蒐集家から名品を譲り受け、多くの刀剣商や愛好家と交流し、指導者と仰いだ。名工に作刀を依頼し、自分の名を刻ませた。1901(明治34)年頃から07(明治40)年、

神戸本邸で展覧会や鑑定会を開いていた(写真)。茶席を設け、芸妓が接待し、音曲師匠たちが演奏した。指導者が鑑識眼を高めるよう努力を、と苦言を呈したことがある。贋作を売りつけられていた。

刀装具の鏝や小柄も蒐集し、伝統的彫金技術保存のため名工に古来の名作を多数模作させた。識者がこの活動を賞賛し、利藻を金工と刀剣各協会の特別会員に推挙した。映画・録音と同じ理由で、自分の所蔵品に加え蒐集家の名品を写真集にまとめている。

刀剣類の価値も想像つかない。1908(明治41)年、利藻は事業資金調達のため骨董商に2千余振りを担保に入れた。返済期限が切れて実業家・根津嘉一郎(1860～1940年)が安値で引き取った。32(昭和6)年満洲事変により刀剣価格が暴騰、根津は二流品や新刀のみを競売に出し、数百万円を売り上げた。利藻の名品は今も根津美術館に収蔵されている。

利藻が絵画に関心を持ったのは写真撮影の構図の参考にするため。利藻は日本画家・西郷孤月の弟と親しかった。孤月は東京美術学校(東京藝術大学の前身)校長・岡倉覚三(天心)門下。その縁から橋本雅邦、横山大観、下村観山らと親交(補註1)。彼らは神戸本邸に逗留し、制作した。京都画壇では竹内栖鳳を蒐集し、実際は利藻没落後も変わることなく、栖鳳死去(1915・昭和19年)まで続いた。

幼少時から父親に連れられ歌舞伎、新派、文楽、歌舞音曲を觀賞し、俳優・師匠たちとも交遊。自らも三味線を習った。

同じく相撲も観戦。当時東京と大阪の相撲協会は別組織(1927・昭和2年合併)。妻(水戸徳川家)の縁から、東京相撲では水戸出身の常陸山を後援した。1903(明治36)年常陸山が横綱に昇進すると、祝いに鞘巻金時絵の太刀を贈った。常陸山が大阪巡業時、土俵入りの太刀を毎日替えたい、と言うのでコレクションを貸し出した。その常陸山が大阪の若手・大木戸(のち横綱)をスカウトする。利藻は大阪協会の要請を受け常陸山を説得、断念させた。行司・木村正直には栖鳳の絵入り軍扇を逃えて贈っている。相撲の魅力、立会の気合と鼠舩力士の評判を聴く時の高揚感、と語っている。

花柳界での豪遊は18、9歳から始まる。父親以来の馴染みがある大阪南地・北新地をメインに、京都の祇園・島原もテリトリー。1901年(22歳)南地の芸妓・豆千代――本名草田正(しょう)16歳――を1万円で身受けし、北浜に別邸を建て住ませた。後年利藻の事業が苦境に陥った時、ゴシップ新聞が「香水風呂」「牛乳風呂」などと彼女の贅沢ぶりを書き立てた。実際はタオルに香水、洗面に牛乳少々、だった。彼女は芸妓に復帰し、その支度金を利藻に提供している。

利藻遊蕩のエピソード。

- (1)1901か02年頃のこと。東京から神戸に戻る際、新橋で音曲師匠・芸妓たちと別れの酒宴。師匠らが汽車に同乗して箱根で一泊。旅館の庭で演奏し、他の客も拍手喝采。後から新橋の芸妓連も追って来て、また宴会。
- (2)02か03年頃大阪の料亭「灘万」で友人たちと忘年会を開催、余興に素人芝居。来演中の一流役者たちが演技指導。豆千代他芸妓たちが良い役につき、役者の事務方が脇を固めた。音曲師匠たちも駆けつけた。
- (3)「海軍の戦闘演習」宴会。これは『利藻伝』に

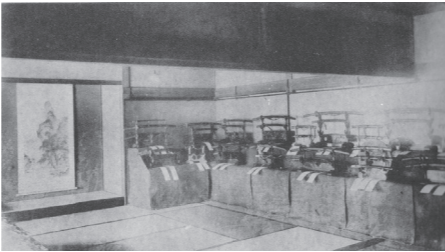
は記載がない。寝台列車一両貸し切り、数十人で箱根に繰り出した。旅館の大広間に豆腐を敷き詰め、小田原と横浜から呼んだ芸妓たちに歌わせ、素足で踏ませ、徳利を植えさせ、田植えと称した。註5

利藻は芸術家、俳優、芸人、力士、職人、芸妓らに対し、ことあるごとに贈り物をし、祝宴を開き、祝儀を奮発する。

同時代に造り酒屋の八代目・鹿島清兵衛(かじま、本名政之助、1866～1924年)がいる。帝大の外国人教授に写真技術を学び、写真館を開業。市川團十郎「暫(しばらく)」撮影、富士山大型写真を宮内省に献上、陸軍の依頼を受け英照皇太后(孝明天皇妃)大喪撮影。花柳界では「今紀文」(紀伊国屋文左衛門)と呼ばれ、豪遊ぶりは落語「鹿島大尽栄華斬」になった。ピールのポスターに起用した新橋の半玉・ぼん太(恵津子)を身受け。学者、文士、画家、芸人ら100人余りを招待して百物語の会(怪談を披露しあう食事会)を開催。森鷗外がこの会を小説「百物語」にした。あまりの浪費に家族会議が廃嫡決定、ぼん太が踊りと歌で生活を支えた(註5、補註3)。能、笛を嗜み、芸術、芝居、音曲、写真に、軍との関係、愛人の献身、利藻と似すぎている。

一体利藻はどれくらいの金を自由にしていたのか、これについても『利藻伝』は明らかにしていない。木村毅(きむら・き(補註2))は、慶應在学中後見人が管理財産から月千円の小遣いを渡していた、と書く。当然光村家から生活費他多額のお金が出ていただろう。木村は、慶應中退後(年月不明、遅くとも1898年)は月70円になり200円の写真機を買うために3ヵ月分貯えた、とも書いている。これが生涯唯一の節約らしい。(註6)

- 註1 増尾利之「光村利藻伝」 光村原版印刷所 1964年
註2 Web「銀座十字屋創業の顛末Vol.4」<https://trial.ginzajuiya.com/parts/images/company/pdf/part3.pdf>
註3 鹿島茂「明治の革新者～ロマン的魂と商業」ベストセラーズ 2018年
註4 週刊朝日編「値段史年表 明治・大正・昭和」朝日新聞社 1988年
註5 戸坂康二「ぜいたく列伝」文藝春秋1992年
註6 木村毅「財界よもやま史話」筑土書房1957年
補註1 1898年岡倉は校長を辞任、大観らと日本美術院を結成。辞任理由は学校運営・教育方針の違いだが、女性スキャンダルもあった。相手は九鬼隆一男爵の妻。隆一は元三田藩士。藩主の親族・綾部藩九鬼家に養子入り。維新後、文部省、宮内省を経て帝国博物館館長。美術学校設立を支援し、岡倉とも親しかった。哲学者・九鬼周造の父。
補註2 木村(1894～1979年)は岡山県出身、編集者、作家、明治文化研究。春秋社で『トルストイ全集』、中里介山『大菩薩峠』を、改造社で『現代日本文学全集』を編集。著書に『小説研究十六講』(新潮社)。戦後東京都参与。晩年松蔭女子学院大学教授。
補註3 作家・劇作家の長谷川時雨がぼん太を「貞節の名高く」と称賛(『新編近代美人伝』岩波文庫、1985年)。写真 刀剣会の一部。上掲[註1]より



みなとMIO MACH ケンチクさんぽ vol.13

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

元町商店街に賑わいが



賑わう元町商店街

新型コロナウイルスの流行も一段落すると、街には人が戻り始めました。元町商店街界隈も以前の賑わいを取り戻しつつあり、土日ともなると、コロナ前にこんな人通りがあったっけ?と訝しがりながら歩くことになりま。もともとインバウンド向けのお店が少なかつたせい、比較的、お店の入れ替わりも少なく、空きテナントの看板も目立ちません。

大丸側から商店街に入ると、全国的に名の知れた和洋の菓子店の本店が存在感を示し、昔からの飲食店や服飾店の間にできた、最近流行の食パンやスイーツのお店に行列ができています。

魅力的な西元町

対して、神戸駅側から商店街に入り、6丁目から東に5丁目へかけて歩いてみると、意外と言っては失礼ですが、こちらも活気があります!!昔ながらのお店の間に地域の物産を取り扱うアンテナショップ的なお店や産地直送の青物屋、果物店がいくつかでき、文字通り、老若男女が行き交っています。店員さんも若い人が多く活気に満ち溢れています。野菜の詰まったダンボールを女の子が颯爽と積み下ろしていて、カッコいいのです。商店街の入り口には個性的な形のトレーラーショップがナポリタンを販売していたり、おしゃれなイタリアンやハンバーガー屋さんもできていたりして、近隣の飲食店や物販店も、心なしか以前より元気に感じます。



元町6丁目の賑わい

試しにインスタグラムで「#西元町」を検索してみると2.6万投稿。「#元町商店街」が6.1万投稿であることを思うと思わず頑張っているじゃないか西元町!!と叫んでしまいます。

新しいお店だけでなく、老舗も健在です。愛してやまない「亀井堂総本店」「陶舗サノヤ本店」「つるてん西店」。また、他所の商店街では、古くなったお店が退店した後に全国チェーンの飲食店や物販店が入ることが多いと思いますが、このエリアでは、ほとんど見当たりません。元町商人の心意気なのでしょう。全国どこにでもあるような、没个性的な街になっていない。素晴らしいと思います。



活気に満ち溢れるマルシェ



個性的なトレーラーショップ



人気の老舗飲食店

さらに素敵な街に

これらのお店への入れ替わりは自然発生的なものなのでしょうか?計画的な店舗配置や出店計画が練られる大型店舗(イオンモールやらら〇ーと)と違い、商店街はいろいろと制約も多いと思いますが、今後伸びてくるであろう飲食店やスイーツのお店、神戸らしい物販店をうまく誘致できる仕組みがあればよいのと思います。ハイカラやレトロだけに頼らない街づくりが理想的です。

周辺にアジアのお店ができること楽しいのと思います。できればベトナムやインドネシアなど、陽気で元気な国のお店。既存の中国人街である南京町やインド、ネパールの料理店のように、異国情緒あふれる神戸の魅力を発信できると思います。

商店街に面した敷地がマンションとなっている場所もところどころ見受けられます。1階部分は店舗となっており、町並みの連続性が保たれています。隣の店舗やアーケードとのつながりに、担当した設計者が四苦八苦しただ跡が見受けられます。比較的うまくいっているものと、そうでないものがあり、今後は一層のノウハウの確立と法整備が待たれます。

それにしても、西元町駅と花隈駅の地味さはどうかしています。もともと、神戸高速鉄道の駅だったからだと思いますが、街に対する愛情が感じられません。阪神、阪急の奮起を期待します。

大型の駐車場がないのも惜しいところ。花隈駐車場をうまく活用できれば良いのですが。意外と駐車場割引サービス目当てで買い物する人は多い気がします。



変貌する元町商店街6丁目入口付近

神戸駅側の商店街の入り口、ホテル跡(さらに以前は三越だったところ)の建物は解体が始まっています。なにか集客力のある建物になれば良いのですが。街の構成上、どうしても神戸駅、ハーバーランド側と分断されたイメージになってしまっているため、今後、整備される道向かいの「きらら広場」や整備中のモトコーなどと合わせて、楽しく巡りたくなる、回遊性のある都市計画が期待されます。神戸駅と元町商店街を動く歩道でつなぐというのは非現実的なのでしょうか。

ジャズが流れて、珈琲の香りが漂う、港を感じられる素敵な街がいつまでもつづきますように。



山岡 哲哉(やまおか てつや)

山岡哲哉建築設計事務所 代表
2001-乙仲通の栄町ビルディングにて建築設計活動
日本建築家協会近畿支部兵庫地域会地域まちづくり委員長